24　次の文章を読んで問いに答えよ。 〈東北大〉　二〇一六年度出題

　「私もね、実習に行ったのよ、保育園に」

　ちょっと唐突にも聞こえたけれど、黙ってうなずいた。

　「もうそんな時期なんだ。で、どうだったの」

　「うーん、それがねぇ」

　ひかりは力なくんだ。

　「私も早希とまったくおんなじこと考えてたよ」

　その笑顔を思わず見つめてしまう。何をいってるんだろう。まったくおんなじこと？　ひかりが？

　「朝、保育園の玄関で赤ちゃんや子供たちを預かるでしょう。そのときに、どうしても意識しちゃうのよ。その子たちのおかあさんのことを。おかあさんがどんな仕事をしているかを」

　よくわからなかった。しっかりしていていつも明るかったひかりが、こんな疲れたような顔で何をいおうとしているのか。

　「私は赤ちゃんも子供たちも大好き。保育士になったら私がしっかり見てるから、おかあさんたちもがんばってきてください、って笑顔で送り出すつもりだったの」

　「うん」

　「それなのにね。相手も、こっちをあんまり信用してないんじゃないかって。子供を持ったこともない若い保育士に何がわかるって思われてる気がして」

　「それは」

　言葉を無理に挟み込んだ。相手も、といったのだ。きっとこの後に、私も、と続く。どこかで止めてあげないと、ひかりがひかりらしくない方向へ屈折してしまいそうだった。

　「それは考えすぎだって。保育士だって最初はみんな新人なんだから、おかあさんたちだってそれくらいわかってるよ。ひかりは優秀だからだいじょうぶ」

　「ううん」

　ひかりはうつむき加減の顔を横に振った。

　「自分でいうのもなんだけど――あ、やだ、私も前置きしてる――小さい頃から優秀だっていわれてきて、でもそこが私のいちばんの弱点だったんだよね」

　⑴淡々と口にするのを聞いて、私は観念した。ひかりも話したがっている。どんなにひかりらしくなくても、それを聞くのが私の役目だろう。

　「自分の子供を産んでないどころか、結婚もしてなくて、赤ちゃん預かりますっていったって信用されなくて当たり前なんだよね。だから、私が信用されないのはしかたないと思うの。でもね、問題なのは私もおかあさんを信用してないところ。きちんと働いてるおかあさんの赤ちゃんを預かるのはいいけど、私よりも働きのよくないような人がだらだら働くために子供を預かるなんて　⑵本末転倒じゃないか、って心のどこかで思っちゃうんだ。もちろん頭ではそれがおかしいってことはよくわかってるの。だって預かるのが私の仕事なんだから。実際はもちろんどの赤ちゃんもどの子供も平等だよ。どの子もかわいい。それはほんとう。だけど、アなんだかもやもやする気持ちは、どうしても残るんだ」

　それが、優秀だといわれ続けてきたことの弊害なのか。私はひかりのように優秀ではないけれど、もしかすると似ているのかもしれない。どうして自分が、と思っている。仕事であろうと、がんばらない人をサポートすることに違和感を持っている。

　がんばれ、といわれて育った。ぎりぎりまでがんばれ。

　努力もしないうちから自分には何もできないと思っている人のことをなまぬるいと思ってしまう。何もできなくてもそれでいいと思っていて、いざというときには誰かが助けてくれると思っていて。その白砂糖みたいな甘さに身震いが出る。そういう人たちの引っかかりのなさが不気味だった。かっこいいとか、きれいだとか、できるとか、速いとか、うまいとか、いろんなほめ言葉を口にするときに、どこにも引っかからないらしい。その称賛を受ける人は、それだけのことを積み重ねてきている。悔しいとは思わないのだろうか。自分にはできなかったことを、誰かはやってのけた。その結果だけを簡単にほめることができるのは、素直だからなのだろうか。屈託のないほめ言葉を聞くと、イ無神経な手で首筋をでられるような心地がした。

　この手に負えない自尊心はどこから来るのだろう。自分も駄目なくせに、がんばれない人を見下す。自分の駄目さを受け入れられず、自分の中にあるかもしれないわずかな可能性をなんとか引き出そうとして、往生際悪くじたばたして、そこでまたを生んで。冷たいとか傲慢だとか陰口をいわれても、否定はしない。しかたのないことだ。きっとほんとうにそうなんだろうと思うから。

　でも、目の前のひかりは違うと思っていた。だって、ひかりはいつもやさしい。頭がよくて、気配りができて、誰からも信頼される人だった。

　少し、気まずかった。でも、気まずさの底にびりびりと流れるものがある。ひかりでも同じような気持ちになることがあるんだ。それもこんな、自意識を持て余したようなみっともない気持ちに。それを話してくれたことがうれしかった。人前で愚痴をこぼすところなど見たこともなかったのだ。どうすればいいかはわからないけど、格闘し続けようと思う。もう少しこの気持ちと格闘していよう。

　だけど、私の口から出たのはどうしようもなく凡庸な、毒にも薬にもならないだった。

　「いろいろあるよね」

　ばかだと思う。もっと気の利いたことを、せめてもっと誠実な言葉をいいたかった。ひかりはあきらめたのか、それとも最初から期待していなかったのか、小さく笑ってうなずいた。

　「うん。いろいろあるね」

　それから、いつもの明るい声に戻って、

　「さ、そろそろ行こうか」

　これから、この近くの劇場で小さな劇団のミュージカル公演があるのだ。そこに、同級生だった原千夏が出演している。これまでも何度か案内をもらってにきているけれど、アンサンブルというのだったか、たいがい舞台の後ろで踊っている一団の中にいた。でも、今回ははがきに「ひとりで歌わせてもらってます」と千夏の字で走り書きされていた。

　案内をもらわなければ、劇団の公演など縁がなかった。何度か観た今だって、ほんとうのところ、ミュージカルには抵抗があるのだ。役者たちのお芝居も大げさ気味だし、台詞の続きで突然歌い出されたりすると観ているこちらが気恥ずかしい。

　「千夏の歌、楽しみだね」

　んだ狭い入り口でチケットを切ってもらいながらひかりが振り向いた。すっかりいつもの笑顔に戻っていて、さっきの話がみたいだ。私はひとり置いていかれたような気分だった。

　舞台は間もなく開演した。第二次世界大戦中の沖縄を題材にしたミュージカルだった。主演の女優が素晴らしかった。裏も表も金ぴかにコーティングされているような声。どこまでも届くような、ずっと伸びていくような声。

　ああ、こういう人がやっぱり主役なんだな、と思う。私はまったくの素人だけど、この主役の人の声と顔と、それから立ち姿の存在感には納得させられる。

　後ろで踊っている中に千夏がいる。相変わらず切りっぱなしの黒髪が跳ね、小柄な身体が弾む。うんうん、がんばっている。千夏、よくがんばっている。

　ほほえましく見守っていられたのは、しかし序盤のうちだけだ。千夏は端役ではあったけれど、ときどき独唱するシーンがあった。だんだん、千夏が登場するだけで呼吸の波が変わるようになった。心臓は早鐘を打っているのに、呼吸は深くなっていく。千夏の動きをよく見よう、千夏の歌をよく聴こう。そんな思いに身体が勝手に反応しているらしい。

　私だけではない。右隣にすわるひかりがずっと息を詰めているのがわかる。会場全体が千夏の⑶一挙手一投足を息をんで見つめているようにも感じられた。

　クライマックスの前に、千夏は死んだ。歌っている途中で銃弾に倒れる役だった。役だと理解できたのは後になってからだ。えっ、と思った瞬間、まだ驚いていることも自覚できないうちに全身にざーっと鳥肌が立っていった。身体の芯が震えた。死ぬな、と叫びたかった。

　死ぬな。生きろ、千夏。もう一度生きて、歌うんだ。

　圧巻だった。千夏は、すごい。千夏の歌は、すごい。何がどうすごいのか、自分でもわからない。歌もお芝居も善ししなどわからない私にさえ、千夏が特別に輝く役者であることははっきりわかった。

　どうして、あの子が、いつのまに。――よかった、という思いと、地鳴りのように繰り返し響いてくる波。すごい、すごい、すごい。千夏への称賛とはまた別の何か、千夏の声と身体を通して現れた何かに対して、ただただすごいと思った。

　幕が下りても、しばらく動けなかった。ひかりの顔を見ることができない。何もいわなくても、隣にいるだけでじんじん波動が伝わってきた。客席の人の波がようやく引いてきたところで席を立ち、普段は顔を出す楽屋へも寄らず、ひとことも口をきかずに劇場の外へ出た。外はまだ明るかった。

　ひかりも私を見ない。きっと同じ気持ちでいる。もしも口を開いたとしても、千夏はすごかったといいあうことしかできなかっただろう。

　駅までの道をふたりで黙って歩いた。さっき待ちあわせをした店はまだにぎわっていたけれど、前を通ってももう別の店みたいに見えた。ウさっきまでの私とは違う私。ここで愚痴をこぼした私たちとはもう別の私たち。

　駅で別れるとき、一瞬、ひかりと目が合った。ひかりの目はまだ真っ赤だった。

　「スライダーズ・ミックスっていう曲があってね」

　思わず口走っていた。

　「スライダーって球、わかるよね？　突然上下左右に大きくカーブする決め球だよ。でもね、それ一球じゃだめなの。ストライクに入らないことも多いから。必ず他の球に交ぜて使うの」

　何をいいたいのか、自分でもわからなかった。いいながら発見する感じだった。

　「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持ってるんだ」

　それを、千夏が教えてくれた。

　「それでね、その球を合わせるの。そうしたらすごくいい試合ができる。ストレートやカーブやシュートや、いろんな球に交ぜてスライダーを投げて乗り切るの。千夏のスライダーはすごかったね」

　ひかりがうなずいている。

　「ひかりのスライダーもきっとすごいよ」

　「早希のもね」

　やっと、ひかりが笑ってくれた。エスライダーを磨こう。そう口にはできなかったけれど、口にするよりもっと強く胸に刻む。いつか私の、私たちのスライダーズ・ミックスのために。

（宮下奈都『終わらない歌』による）

問１　傍線の箇所⑴⑵⑶の語の意味を簡潔に説明せよ。

問２　傍線の箇所ア「なんだかもやもやする気持ちは、どうしても残るんだ」とあるが、「もやもやする気持ち」が「残る」のはなぜか。「ひかり」の発言に即して四十字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所イ「無神経な手で首筋を撫でられるような心地がした」とあるが、何に対してそう感じているのか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

◎問４　傍線の箇所ウ「さっきまでの私とは違う私」とあるが、「私」を変えた直接のきっかけは何か。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問５　傍線の箇所エ「スライダーを磨こう」とあるが、そこにはどのような気持ちが込められているのか。本文全体の趣旨を踏まえて七十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝感情を表に出さず、あっさりと。

　　　⑵＝大切なこととつまらないことを取り違えること。

　　　⑶＝細かな一つひとつの動作やしぐさ。

問２　Ａ自分より努力していない母親のためにＢ頑張らなければならないことにＣ納得できないから。（４０字）

Ａ＝３〔本文中の「私よりも働きのよくない」を言い換えてあること。「私より努力不足」「私より働きが悪い」なども可。〕

Ｂ＝３〔「助ける」というような表現も可。〕

Ｃ＝３〔「割り切れない」「違和感がある」なども可。〕

文末＝１

問３　Ａ他者への依存心が強くて努力もせず、Ｂそれに無自覚な人がＣ屈託なく誰かをほめる言葉。（３９字）

Ａ＝３〔本文中の「努力もしないうちから自分には何もできないと思っている人」をまとめてあること。〕

Ｂ＝３〔「甘さ」を言い換えてあること。「努力不足に無自覚」「無反省」「やましく思わない」なども可。〕

Ｃ＝３〔「平気でほめる」「無邪気にほめる」なども可。〕

文末＝１〔「言葉」以外では、「人」も可。〕

問４　Ａ端役で舞台の後ろの一団で踊る千夏がＢ努力の結果、Ｃ声と身体を通して現れた歌と演技でＤ自分や観客を引き込み感動させたこと。（５７字）

Ａ＝３〔「アンサンブルの一人にすぎない」なども可。〕

Ｂ＝１

Ｃ＝３〔千夏の「声と身体」での演技であることが説明されていること。〕

Ｄ＝３〔「感動させた」という内容があること。これがなければ全体０。〕

問５　Ａ自分の弱点や自意識を持て余し他人を見下すのではなく、Ｂ自分の可能性と持ち味を引き出して、Ｃ人の心に寄り添える人間になろうという前向きの気持ち。（６９字）

Ａ＝３〔「他人を見下して自尊心を保つ」という内容があること。〕

Ｂ＝３〔「自分の可能性」や「個性」「持ち味」を信じ探すという内容があること。〕

Ｃ＝４〔「努力していこうという前向きの気持ち」が書けていること。これがなければ全体０。「仲間と共に歩もう」なども可。〕